第６分科会

四日市市文化会館

第２ホール



第６分科会

会 場　四日市市文化会館　第２ホール

発表テーマと発表PTA

◆次代につなぐ福光東部小育友会
～学校統合を控え、より一層地域での顔の見える関係づくりを目指して～
／富山県南砺市立福光東部小学校育友会

◆持続可能なPTA活動の在り方を模索して
～「全部会廃止」から始まる、令和の時代に即した
新たなパートナーシップの構築～
／三重県朝日町立朝日中学校PTA

助　言　者

●朝日町教育委員会教育課　指導担当課長兼指導主事　　藤田　貴大

講　　演

◆小規模化する学校　～教育の質は確保できるのか～

講 演 講 師

●三重大学　特命教授（地域連携担当）、 前三重県教育委員会教育長
福永　和伸

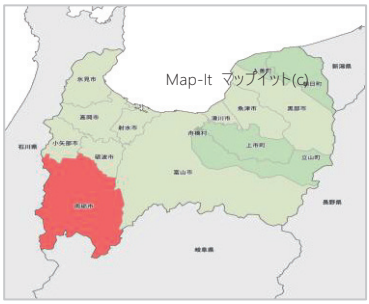
次代につなぐ福光東部小育友会
～ 学校統合を控え より一層地域での顔の見える関係づくりを目指して ～

富山県南砺市立福光東部小学校育友会
会　長　　梅　原　通　子

１　はじめに

(1) 地域および校区の紹介

南砺市は平成 16 年 11 月に４町４村が合併した自然に恵まれた地域で、人口は約４万５千人である。



校区は、小矢部川東岸に広がる、吉江、北山田、山田の３地区で構成されている。春は小矢部川河川公園の桜、夏は水田を回りながら太鼓を打ち鳴らし、竹で稲に付いた虫を払って五穀豊穣を願う「ねつおくり」が開催される。秋には良質な米が実り、全国的に知られる山田地区の特産品「富山干柿」は最盛期を迎える。冬は雪遊びやスキーなど、四季折々の自然と文化に親しむことができる。

(2) 学校紹介

本校は、昭和 57 年４月に旧福光町の吉江、北山田、山田の各小学校が統合し、福光町立福光東部小学校として創立した。平成 16 年の町村合併により、現在の校名となり、令和４年には創立 40 周年を迎えた。令和８年４月１日現在、１０学級 197 人が在籍している。


【校舎風景】

「やってみよう～ひろげよう　つなげようみがこう～」を本年度の重点目標に、子どもたちは様々な活動に積極的に取り組んでいる。

２　ＰＴＡ組織

本校の育友会は、執行部（会長１名、副会長３名、事務局長１名、会計１名、書記１名）、顧問２名（うち１名は学校長）、会計監査委員２名、各専門委員会（保健生活、交通安全、広報）、学年委員会、そして吉江、北山田、山田の各地区役員及び一般会員で構成されている。今年度は『あせらずくらべず見守ろう　一人ひとりの歩みを大切に』をスローガンに掲げ、子どもの教育的・生活的環境の向上を目指し、校区の特長を生かした様々な活動を展開している。

［保健生活委員会］
- 親子清掃美化活動
- アウトメディアチャレンジ、生活リズムチェック、親子歯磨きチェック

［交通安全委員会］
- 交通安全啓発看板の設置
- 街頭指導、自転車教室の協力

［広報委員会］
- 広報紙「東雲」年２回発行

［学年委員会］
- レクリエーションや体験型学習などの学年活動

［総務委員会］
- 早朝美化活動、通学路点検
- 子ども１１０番の家の登録、継続依頼

［役員会］
- 全ての役員により構成された総会に次ぐ意思決定機関

委員会活動以外にも、学校や地域と連携しながら様々な活動を行っている。運動会のテント設営や休日早朝清掃など、子どもたちの学習環境を支える活動をしている。

夏休みには地区育友会が中心となり、毎朝ラジオ体操を行う。子どもたちは決まった場所に集まり、元気いっぱいに体を動かしている。時には地域の皆さんも一緒に参加してくださり、自然な「おはよう！」の挨拶や交流が生まれている。

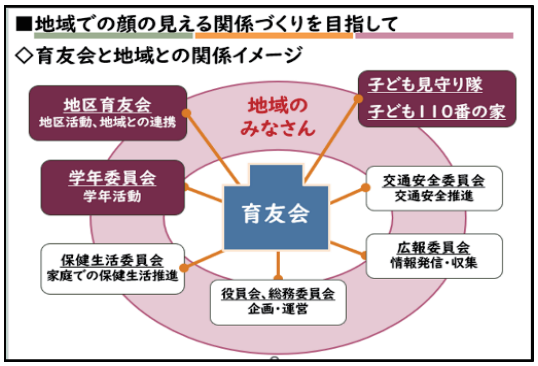
また、子どもたちの自転車点検も実施している。育友会が作成した点検表をもとに故障箇所がないか確認し、安全に乗れる状態かを点検している。問題のない自転車には点検済みシールを貼り、安全意識を高めるようにしている。

ラジオ体操最終日に行うクリーン作戦では、周辺の掃除やごみ拾いを行い、地域をきれいにする活動にも取り組んでいる。

３月の「親子で通学路を歩こう」では、新一年生と在校児童、そして保護者たちが一緒に通学路を歩き、子ども目線と親目線で危険箇所の認識の違いを確認するとともに「子ども１１０番の家」の場所を確かめながら、安全への意識を高めている。

これらの活動は、地域、育友会、子どもたちがお互いの「顔の見える関係」を築きながら、地域の絆を深める素敵な機会になっている。

３　顔の見える関係づくりを目指して



【育友会と地域との関係図】

「顔の見える関係づくり」を実現するため、育友会では「子ども１１０番の家」、「子ども見守り隊」、「学年委員会」、「地区育友会」の「四つの柱」を中心に活動を進めている。

(1) 子ども１１０番の家



校区には、子どもたちが登下校中などに危ない事や困ったときの駆け込み場所として「子ども１１０番の家」があり、現在会社や店舗、一般家庭、合わせて 44 箇所の皆さんに協力をいただいており、下校時にトイレをお借りしたり、水分をいただいたりすることもある。「子ども１１０番の家」には対応マニュアルをお渡しし、緊急時の適切な対応をお願いしている。また、目印となるステッカーを玄関先などに提示していただいている。

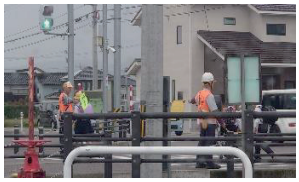
「子ども１１０番の家」の登録や継続のお願いは育友会が担っており、地域全体で子どもたちの安全を守る大切な取り組みとなっている。

子どもたちからは、日頃の感謝を込めて協力先へ感謝状をお贈りしている。

(2) 子ども見守り隊

「子ども見守り隊」は平成 17 年 9 月に結成され、現在 76 人の地域の方々が子どもたちの登下校を交代で見守ってくださっている。通学路に立ち、交通安全を支えるだけでなく「おはよう！」「いってらっしゃい！」の、温かい声かけは、子どもたちの安心につながっている。

春に行われる「見守り隊対面式」では、子どもたちが感謝の気持ちを伝え、歌を贈っている。この交流は、隊員の皆さんにとっても楽しみの一つとなっている。地域の方との顔の見えるつながりを持つことができるこの温かい見守りは、子どもたちの安全と笑顔を支える大きな力になっている。



(3) 学年委員会

学年活動には、地域の方を講師として招き、親子で参加する。１学年はエアロビクス教室、２学年はスポーツ教室、４学年は夏に星の観察、５学年はおはぎ作りに取り組む。

３学年の交通安全教室は、警察の方から自転車の交通ルールを学び、体育館内に再現した道路で走行を体験する。交通安全委員会も会場設営や走行補助に協力する。本校では、この教室を受けてから一人で自転車に乗って出かけてよいルールになっている。６学年は、戦渦を避けて旧福光町で約６年８か月の間、創作活動を続けた世界的版画家の棟方志功さんへの敬意を込めて、版画を使って行燈を制作する。完成した行燈は、毎年夏に開かれる地区行事「がんばる吉江いきいき祭り」に合わせてJR福光駅前に展示され、優秀な作品は吉江地域づくり協議会から表彰されている。

(4) 地区の育友会の活動

本校区には３地区の育友会があり、それぞれが地域の特色を活かした活動を行っている。

ア 吉江地区育友会

a 吉江ふれあい広場・食堂



子どもたちの居場所づくりを目的に毎月第２土曜日に開催される「吉江ふれあい広場」の運営に参加している。子どもから大人まで、モルックや段ボールを使った造形遊びを楽しんでいる。続いて開催される「ふれあい食堂」では、「食」を楽しむことができる。学校以外の場所で、日頃顔を合わせることが少ない地域の皆さんとの交流を深めている。

イ 北山田地区育友会

a 納涼祭の子どもコーナー



夏休み期間中に開催される地区納涼祭では、ボールすくいやくじ引きゲームの千本釣りなどが楽しめる「子どもコーナー」を運営し、園児から小学生までの子どもたちやその保護者との交流の場を提供している。

b 文化祭の居場所づくり



地区文化祭では、小学生の絵画や立体造形などの作品展示のほか、高齢者・子ども居場所づくりコーナーで、ゲーム体験の補助をしている。併設する飲食コーナーから温かく見守る地域の人々からは「〇〇さんとこの△△ちゃんけ？大きくなったね」と自然と会話が生まれ、地域の顔の見えるつながりが増える場にもなっている。

ウ 山田地区育友会

a クリーン作戦



保育園や中学校の各ＰＴＡ組織と合同でクリーン作戦を実施している。園児から保護者までが一堂に会し、清掃に汗を流している。中学生が年下の子をリードし、幅広い世代が協力して地域環境を整える姿は地区の絆の象徴である。地域の方からの「いつもありがとう」という温かな声かけもあり、活動を通じて「顔の見える関係」を築くとともに、郷土愛や感謝の心を育む貴重な交流の場となっている。

b サマーフェス・文化祭り



夏のサマーフェスや秋の文化祭りでは、物販スタッフ等として参加している。会場の山田地区交流センターには赤ちゃんから高齢者までが大勢集まり、飲食やカラオケ、芸能発表、作品展示を楽しんでいる。会場のあちこちで「大きくなったね！」「頑張っとるね」と、家族のような会話が弾む、大切な時間となっている。

エ 三地区合同サツマイモ掘り

校区の三つの地域づくり協議会が合同で農作業体験を開催している。三地区の園児から小学生、その保護者たちが北山田地区の畑に集い、春に苗を植え、秋には大きく実ったサツマイモを収穫する。共同作業を通じて地区を越えた「顔の見える関係」と、互いを助け合う温かな絆が育まれている。



4　成果と今後の課題

(1) 活動の成果

育友会はこれまで、学校・家庭・地域が同じ方向を向き、子どもたちの健やかな成長を真ん中に据えた「顔の見える関係づくり」に全力を注いできた。「子ども見守り隊」による温かな声かけや、地域行事への積極的な参画、そして保護者同士が手を取り合い支え合ってできた絆の輪は、一つひとつの地道な積み重ねにより、地域全体の安心感と強固なつながりを育んできたと確信している。子どもたちが地域の方々に親しみを感じ、見守られている実感を持てる環境を築くことができたのは何よりの成果である。

(2) 今後の課題

令和10年度には、小学校の統合という大きな節目を迎える。慣れ親しんだ環境が変わることへの不安の声もあるものの、それ以上に、新しい仲間との出会いによってより豊かな地域コミュニティを再構築できる大きな可能性が広がっている。

統合後は約560名の児童が学ぶ学校となり、ＰＴＡ活動に参加する保護者も大幅に増える見込みである。現在、統合に向けた協議会が発足し、統合する小学校に通う予定の園児の保護者や小学校の保護者、さらに同じタイミングで統合する中学校の保護者も参加し、話合いが進められている。それぞれの学校が培ってきた特色ある取組や良さを生かし、子どもたちにとってより良い学習環境をどのように整え、支えていくかについての協議が重ねられている。これまで別々の場所で子どもたちを支えてきた他校区の保護者や地域の皆さんと、互いの良さを尊重しながら、新しい信頼関係を丁寧に育てていくことが、これからの私たちに課せられた大切な課題と役割であると考える。

(3) 今後の展望

統合後も、子どもたちが新しい環境でのびのびと挑戦し続けられるよう、学校・家庭・地域がこれまで以上に厚く協力し合う体制を整えていきたい。私たち福光東部小学校育友会は、これまでの歩みで得た経験と絆を土台に「地域のみんなで子どもを育てる」という志をさらに広げ、次代へとつなぐ温かい地域づくりを進めていく。子どもたちの笑顔が、新しい学校や地域でも絶えることのないよう、未来を見据えた活動を続けていきたいと考える。

持続可能なＰＴＡ活動の在り方を模索して
～「全部会廃止」から始まる、令和の時代に即した新たなパートナーシップの構築～

三重県朝日町立朝日中学校ＰＴＡ
会長　笠　原　由加利・元会長　福　永　絵　美

1　はじめに

（1）本校の概要と急激な生徒数の増加

本校は、三重県で最も面積の小さい自治体である朝日町に位置する唯一の中学校です。平成 2 年に川越町との組合立から分離独立し、創立 37 年目を迎えます。

本校の歩みを語る上で外せないのが、近年の大規模な宅地造成による急激な生徒数の増加です。以前は全学年 2 クラス程度で推移するこじんまりとした学校でしたが、ピーク時には全学年 5 クラスにまで拡大しました。令和 8 年度は減少期に入りつつも全校生徒 382 名（14 学級）を擁しています。

特筆すべきは、「あさひ園（保幼一体）・朝日小学校・朝日中学校」という一園一小一中の構成です。多くの子どもたちとその保護者が十数年間にわたり同じ人間関係の中で育つため、学校・保護者・地域が「育ちのリレー」を意識した密接な連携体制を築いてきました。

（2）地域特性と保護者の多様化・潜在的な結びつき

急激な人口流入は、学校規模だけでなく保護者の構成にも大きな変化をもたらしました。新興住宅地の増加に伴い、都市圏へ通勤する若い核家族層や共働き世帯が一般化し、保護者の価値観やライフスタイル、ＰＴＡ活動に対する考え方も多様化していきました。

その一方で、一園一小一中という環境ゆえに、就学前の段階から保護者同士が顔を合わせる機会が自然に確保されており、もともと保護者間の結びつきが非常に強い地域でもありました。そのため、ＰＴＡ活動を通じてあえて保護者同士を義務的に結び付けずとも、日常的に顔見知りの関係性が成立しており、互いの悩みや疑問を相談し合える土壌がありました。結果として、子育ての悩みを一人で抱え込んで孤立する保護者は比較的少ないという、本町ならではのポジティブな土台が存在していたのです。

（3）子どもの発達段階におけるＰＴＡ活動の「引き算」

もう一つの重要な視点が、中学生という子どもの「発達段階」です。小学校時代とは異なり、中学生になると子どもが親にべったりとくっついていく機会は自然と減少します。保護者側にも、一歩引いて子どもを「見守る」というスタンスが芽生えてくる時期です。

小学校の段階では保護者参画のもとで行われていた活動も、生徒の自立とともに、保護者の手から離れていく傾向にありました。学校教育の充実に伴い、ＰＴＡ活動がこれまでの「形」を維持し続ける必要性そのものが薄れ始めていたのです。

（4）旧来の役員選出システムが抱えていた限界

しかし、組織の運営面では深刻な課題が浮き彫りになっていました。平成 31 年以前、ＰＴＡ役員は長年「地区ごとの輪番制」によって選出されていました。大規模な宅地造成によって地区ごとの世帯数に

著しい格差が生まれ、特定の地区に過度な負担がかかるなど、輪番制は完全に制度疲労を起こしていました。

そこで本校ＰＴＡは、この歪みを解消すべく、輪番制を廃止し「立候補、もしくはくじ引きによる選出」へと改めました。現在は、次年度 3 年生の保護者から会長を、次年度 2 年生の保護者から副会長を選出する選考ルールへと見直しを行い、選出プロセスの公平性と透明性を確保しています。

２　改革の決断とプロセス

(1) 既存部会の現状分析と形式的な「委員会」の実態

長年続いていた本校の専門部会は、学年ごとの各クラスから 1 名ずつ選出される形で構成されていました。しかしその実態は、活動内容が乏しいにもかかわらず「枠組み」だけが残り、形にこだわるあまりに学級委員を選出しなければならないという、本末転倒な状態に陥っていました。

そのため、「ＰＴＡ役員だから、しなければならない」という義務感だけで活動が行われ、重要な報告や議題もないまま、集まったものの数分で終了してしまう定例委員会すら存在していました。年間スケジュールにあらかじめ組み込まれているため、中身がなくても形式的に開催せざるを得ず、多忙な保護者の時間を奪う大きな要因となっていたのです。

ア 保健体育部（1 年生・各クラス 1 名）

現状・課題：従来担当していた奉仕作業は生徒と教員で十分対応可能であり、体育祭のＰＴＡ競技も廃止されたため、定例会が形式化していました。

改革の判断：廃止（今後は必要な場合のみ都度対応）。



（Ｒ６第１回花いっぱい運動の様子）

イ 文化研修部（2 年生・各クラス 1 名）

現状・課題：学校ホームページのリニューアルに伴い、教員によるリアルタイムな情報発信が格段に充実したため、紙の広報誌を発行する意義や必要性が低下していました。

改革の判断：廃止（ホームページによる情報発信へ集約）。



（最後となった 77 号ＰＴＡ通信）



（朝日中学校 HP）

ウ 家庭教育部（3 年生・各クラス 1 名）

現状・課題：スクール給食の導入により、これまで実施していたお弁当講習会の意

義が消失しました。また、動員型の講演会も出席者の減少により運営が限界に達していました。
改革の判断：廃止（今後は任意参加の形や、オンラインの活用へと切り替え）。

エ 学級委員（各クラス）
現状・課題：懇談会の出席者がほぼ皆無の状態が続いており、形だけの集まり（形式的な組織）となっていました。
改革の判断：廃止。

(2) 5年間の継続性とコロナ禍が生んだ「確信」

このドラスティックな全部会廃止を成し遂げられた背景には、当時のＰＴＡ会長による長期的なリーダーシップがありました。この会長は平成31年に副会長を務めた後、令和2年から令和6年まで5年間にわたり会長職に従事し、結果的に6年もの長きにわたって役員としてＰＴＡに携わることとなりました。

一般的にＰＴＡ会長が単年度で交代する仕組みでは、課題を認識しても改革の実行前に退任となってしまうケースが後を絶ちません。しかし、本校では同一の会長が長期間継続して活動の成果と課題を注視できたため、課題克服のための十分な準備期間を確保することができました。

さらに、その在任期間の多くがコロナ禍による活動自粛期間と重なったことも、大きな転換点となりました。全ての活動が強制的にストップしたことで、「本当に必要な活動」と「なくても影響のない活動」を冷静に見極めることができ、「部会を全て廃止し、委員会のためにわざわざ学校へ行くという形式的な維持を心配しなくても、保護者は興味や関心の高い学校教育活動には自発的に参加してくれる」という確固たる実績と確信を得ることができたのです。

3 組織の再編と「つながり」を残す決断

(1) 本部だけを残す組織設計と「三重郡ＰＴＡ」への所属

部会全廃に伴い、ＰＴＡ組織は従前から存在していた「本部役員のみ」が残る非常にシンプルな形へと移行しました。なお、この改革によって本部役員の業務負担が増減したわけではなく、本部の本来の役割に集中できる環境が整った形になります。

世帯の多様化や負担軽減の文脈から「ＰＴＡ脱退」を選択する保護者の動きが全国的に見られる中、朝日中学校ＰＴＡとしては「校内の形は最小限にするが、周辺とのつながりは強固に残す」という決断を下しました。

本校は、朝日町・川越町・菰野町の3町で構成される「三重郡ＰＴＡ連絡協議会」に属しています。町内に一つしかない中学校だからこそ、近隣の学校と横の連携を図り、情報交換を絶やさないことが重要です。孤立を避け、郡全体のネットワークに所属し続けることで、子どもたちに近隣校と同等の豊かなＰＴＡ活動の機会を保証すべきであると考えたのです。

(2) 「学校にお任せ」ではない、町視点での発信

校内の活動を極限までシンプルにスリム化しましたが、これは決して「学校への丸投げ（お任せ）」を意味するものではありません。

朝日中学校ＰＴＡは、朝日町から依頼される各種会議（青少年育成、地域活動・地域行事、学校給食に関する委員会など）には、町の唯一の中学校ＰＴＡとして責任を持って出席しています。朝日中学校という狭い枠組みにとらわれず、「町全体」

という俯瞰した視点から、地域のつながりを大切にしつつ、保護者の声を直接行政や地域へ届ける機会を確実に担保しています。

４　改革後の成果と生徒への「後方支援」

(1) 生み出された「余白」の家庭への還元と会費の減額

全部会を廃止したことで生み出された保護者の「時間」や「エネルギー」について、本校ＰＴＡでは、それを別の新たな活動（サポーター制など）で埋めることは現時点では考えていません。この「余白」の時間は、それぞれの家庭での教育の充実や、我が子にそそぐ愛情の時間にあてる形で、各家庭にそのまま還元していきたいと考えています。これこそが、現代の保護者にとって最も持続可能で本質的なＰＴＡの在り方だと考えるからです。

さらに、この改革は保護者の時間的負担だけでなく、経済的負担の軽減にも直結した。全部会を廃止したことで、各部会の事業費や事務にかかる諸費用など、ＰＴＡ活動に係る費用が大幅に削減されたのである。本校ＰＴＡでは、この削減分をそのまま保護者へ還元すべく、徴収するＰＴＡ会費の減額に踏み切りました。

活動のスリム化が、結果として「家庭の時間的・金銭的な負担軽減」という目に見える成果を生み出し、保護者からの高い納得感と支持を得る大きな要因となっています。

(2) 物的・財政的な「後方支援」へのシフト

組織をスリム化した現在も、生徒の学校生活に欠かせない必要なものの購入などへの支援は継続しています。

町（行政）を通じての物的な支援は、手続き上どうしても非常に長い時間を要してしまいます。しかし、ＰＴＡが「後方支援」に徹することで、生徒の活動を支えるための瞬時の対応（スピード感のある物資調達など）が可能となりました。

また、従来ＰＴＡ活動として保護者が汗を流してきた「除草作業」などについても、今後はＰＴＡが財政支援を行い、外部の専門業者等へ委託していく方向で検討を進めています。現代の保護者の間でも「時間を割いて自分たちで作業するより、外部へ委託する」ということに対して比較的寛容で抵抗感が少なく、この方針への賛同も非常に得られやすい状況となっています。

５　むすびに

朝日中学校が断行した「全部会廃止」は、単なる組織の解体や負担軽減の追求ではなく、「校内はどこまでもシンプルに、しかし周辺地域や行政とのつながり、そして子どもたちへの後方支援は強固に残す」という、これからの時代における新しいパートナーシップの形です。

伝統のある地域において、長年続いた前例を変えることには大きな葛藤と勇気が必要でした。しかし、6 年間にわたり腰を据えて課題と向き合ったリーダーシップと、コロナ禍という契機があったからこそ、実態に合わなくなった形式を手放すことができました。

「組織の形式的な維持」に追われる日々を終わらせ、生み出された時間をそれぞれの家庭へと還元する。そしてＰＴＡは、学校と生徒を迅速に支える強固なバックボーンとなる。

「前例があるから続ける」のではなく、「子どもの笑顔のために、今何ができるか」を問い続ける。

本校の実践が、全国で悩むＰＴＡ関係者の皆様の、一歩踏み出すヒントになれば幸いです。